

五瓣の椿

2006(平成18)年1月10日鑑賞(シネ・ヌーヴォ)

★★★★



監督＝野村芳太郎／原作＝山本周五郎／出演＝岩下志麻／加藤嘉／左幸子／田村高廣／伊藤雄之助／小沢昭一／西村晃／岡田英次／加藤剛（松竹配給／1964年日本映画／163分）

……『極妻』シリーズで年増女のすご味(?)をみせる岩下志麻は知っている、20代の可憐で美しい彼女を知らない若者が多いはず。なぜ、むさし屋の一人娘おしのが、男たちへの復讐に命を燃やすことになったのか？そして、その殺しのテクニックは？死体の側におかれた一輪の真っ赤な五瓣の椿の意味するものは……？そんな娘ゴコロの哀しさとちょっとエロティックな姿をタップリと味わいたいものだ。そして同時に「御定法」が空洞化している時、自力で正義の鉄槌を下すことの可否についても、じっくりと再検討してみる必要が……。

原作は山本周五郎

最近の時代劇は『たそがれ清兵衛』(02年)、『隠し剣 鬼の爪』(04年)、『蝉しぐれ』(05年)など「藤沢周平モノ」が席捲している感がある(?)が、ひと昔前は、同じように庶民の生活に目を向けた「山本周五郎モノ」が人気で、テレビドラマでもよく取りあげられていたもの。

その中で、この『五瓣の椿』はちょっと恐い、若い娘による「復讐モノ」だが、それに華やかな彩りを与えているのが真っ赤な椿。次々と発見されていく男の死体の側には1輪の真っ赤な椿が添えられているのがミソだが、さてその意味するものは……？

主人公は『極妻』とは全く違う可憐な岩下志麻

この映画は若い娘による復讐劇だから、その成否は99.9%主人公の演技にかか

っているのは当然。そんな主人公おしのを演ずる岩下志麻は、1941年1月3日生まれだからこの映画当時23歳。誰でもそうだが、若く美しい時代は清純派女優として売った時期があるもので、今ドキの若い人には『極妻』で有名なはずの岩下志麻も、この頃がちょうどその時期……。

もっとも岩下志麻より少し若い1945年生まれの吉永小百合では、主人公の可憐さは表現できても、この映画における若い娘の情念や怨み、そして殺人計画を実行していく手練手管の表現はとてもムリ……？

まさにこの映画は、松竹の若手演技派実力派女優としての岩下志麻を天下に知らしめた記念すべき作品。

物語の大前提は？

主人公のおし（岩下志麻）は、むさし屋喜兵衛（加藤嘉）と内儀おその（左幸子）の一人娘。喜兵衛はムコ養子で家業を守るべく必死で働いてきたが、今は結核で病床に伏しており、今年の冬を越すことも難しいような状態。

ところが、おそのは家業など見向きもせず、あちこちに男をつくって遊びほうける毎日。

「放蕩三昧」という言葉は、男の遊びだけに使われる言葉だと私は理解していたが、どうもそうでもなさそうだとすることがわかりビックリ。今風に言えば、さしずめ「ホスト通いにうつつを抜かす年増女」というところか……？

美しいタイトルの意味は？

おしのは放蕩三昧の母親を憎んでいるが、その分逆に父親を愛しており、甲斐甲斐しくその側に付き添っていた。今日は、おしのが病床にある喜兵衛の心を少しでも和らげようと枕元に赤い椿の花を生けていた。そんな時、長い間家業ばかりに追われ、何の楽しみも余裕もなかった喜兵衛が、突然おしのに語りはじめた椿の花の思い出とは……？

若い娘による男の刺殺体の側には、いつも一輪の真っ赤な五瓣の椿が置かれていたが、それはなぜ……？ それを考えさせるのが、すばらしいこの原作の美しいタイトルだ……。

火事による死亡者は確定……？

天保5年正月12日の夜半、本所亀戸天神のむさし屋喜兵衛の寮が燃え、焼跡から3人の焼死体が出た。それは結核に冒された当主喜兵衛と、妻おその、そして娘おしののものと認められ「事件」は終結した。しかしそれはホントに単純な火事による被害、それとも……？

男たちが次々と殺されていく中、さまざまな秘密が少しずつ暴かれていくのがこの映画の面白さ。したがって、この評論はネタバレにならない程度にとどめなければ……。

第1の犠牲者は……？

映画の冒頭は芝居小屋のシーンから。常磐津の三味線弾きとして人気絶頂の岸沢蝶太夫（田村高廣）は、言い寄ってくる轟真筋の女がたくさんいるにもかかわらず、毅然とした美しい素人娘にベタボレで、何とかモノにしようと思死に口説いていた。

その娘の名はおりう（岩下志麻）だが、彼女はなぜか自分の身元を明かさず、秘密っぽい雰囲気がいっぱい。男にとっては、それがまた大きな魅力……？

ところが逆におりうは蝶太夫のことをよく知っており、せっかく一杯飲みながら隣室に布団を敷いて準備万端整えているのに、おりうは男をじらし、いろいろな会話を仕掛けてくるだけ。

そんな会話の中、明らかになったのが、むさし屋の内儀おそのがこの蝶太夫に入れあげていた時期があり、その時、あるスキャンダルが発生したこと……。

若い娘に珍しく、男心を手玉にとる見事な手練手管に焦らされながら、やっとオーケーとなったが……。しかし翌朝この部屋から発見されたのは、銀のかんざしで胸を一突きにされた蝶太夫の死体だった。そして、その側には一輪の真っ赤な五瓣の椿が……。

第2部からは与力が登場

この『五瓣の椿』は3時間近くの大作であるため、第1部と第2部分かれて

いるが、これは1964年当時としては珍しいスタイル……？ 同様のスタイルの映画の中で第1部のラストシーンの印象が強いのは何といってもあの『風と共に去りぬ』（39年）でビビアン・リー扮するスカーレット・オハラがしっかりとタラの大地に足をふんばり、ふりかざした拳を握りしめながら、「もう誰も絶対に飢えさせません。神様誓います」と叫ぶシーン。

これに対して『五瓣の椿』の第1部のラストは、むさし屋喜兵衛の寮が炎上するシーンだが、これも相当印象深く美しいもの。第1部は復讐劇の序盤戦が紹介されるが、第2部からはいよいよ八丁堀の与力青木千之助（加藤剛）が登場し、捜査の開始だ。

第2の犠牲者は……？

第2の犠牲者は京橋水谷町の本道婦人科の医者海野得石（伊藤雄之助）。この得石は、あの顔の長い（馬ヅラの）名俳優である伊藤雄之助が演じているからかもしれないが、いかにもスケベで強欲な医者という雰囲気グンと……。

野村芳太郎監督が医者悪者に仕立てあげている作品は、松本清張原作の『わるいやつら』（80年）、黒岩重吾原作の『背徳のメス』（61年）、そして山本周五郎原作の『五瓣の椿』だが、『背徳のメス』も『五瓣の椿』も産婦人科医というのが面白い……？

この得石医師が施す、禁忌とされている淫靡な治療法とはどんなもの……？ 映画だけではわからない人は、原作を読んでもっと深く研究してみる価値があるかも……？

得石はそんな方法で高価な謝礼を受けとっていただけではなく、今でいう資金運用能力もあったようで、たくさんの証文をもち、その経営を女にやらせていたというから、医者としてだけではなく事業家としてもかなりのワル……。

こんな得石が蝶太夫と同じような手口で殺されたのは、得石が熱をあげていた、おみの（岩下志麻）という17、8歳の謎の美女の手によるものと判断されたが、得石はなぜ……？

得石が死亡する直前のおみのとの会話で明らかになったのは、ここでもむさし屋の内儀おそのに得石が特殊な治療を施した後、ズルズルと2人の関係が続いて

いたということ。もっともそれは、おみのの胸の中だけにしまわれたことだから、他の誰にもわかることではなかったが……。それにしても、この美しい娘おみのとは一体誰……？

第3、第4の犠牲者は……？

同じ手口による第3の被害者は、お倫（岩下志麻）と名乗る若い娘の「婚約者」と名乗る香屋清一（小沢昭一）。そして第4の被害者はおよね（岩下志麻）と名乗る若い女に入れあげていた、もと中村座の従業員の佐吉（西村晃）。佐吉はむさし屋の内儀おそのの姦通の手引きをした男らしい。

このように同じ手口による被害者は4人に拡大したが、その下手人は若く美しい女というだけで何の手がかりもつかむことができない状態。そのためイライラしながら懸命に捜査に奔走する青木だったが、いつも後手をふむばかり。さて、第5の被害の発生はあるのだろうか……？

下手人の主張の正当性は……？

同じ方法で3人の男が殺された後、かなり追いつめられているはずの下手人から青木に1通の手紙が。そこには、あと2人殺した後、必ず自首すると書かれていたが、それとは別に下手人の主張が明確に述べられていた。それは、「御定法」で罰することができない者に対して、自分が天に代わって処罰しているのだというもの。

この手の「人種」は昔からあるもの（？）で、日本では何ととっても長寿人気時代劇『必殺』シリーズにおける藤田まこと演じる中村主水を中心とした「秘密グループ」がその典型。そのニーズはアメリカにもあるとみえて、ハリウッド映画の『シン・シティ』（05年）に登場する3人の主人公たちの価値観やスタンスも同じようなもの……？ さらに有名なドストエフスキーの『罪と罰』の主人公ラスコリニコフが金貸しの老婆を殺すことを正当化するための主張もこれと似たようなもの……？

それはともかく、「御定法」が十分機能せず、現実が悪が生き続けているとしたら、この下手人のような考え方に惹かれることはたしかだが……？

そして第5の被害者は……？

第5の被害者は、日本橋の袋問屋の丸梅源次郎（岡田英次）、になるはずだった。しかしこの源次郎が今日モノにしようとしていた若く美しい娘おしの（岩下志麻）は、源次郎を殺すことなく、一生苦しみながら生きていけ、と宣言した。今や過去の忌まわしい事実がすべて明白となった源次郎は、以降、おしのが狙ったとおり茫然自失の状態に……。

さて、この源次郎とおしのとの間でどんな会話が交わされ、どんな真相が明らかになったのだろうか？ それは絶対、ここでは書けないもの。映画を観てのお楽しみに……。

死刑執行を待つ死刑囚の気持は……？

遂に下手人は逮捕されたが、それは誰……？ 岩下志麻が1人5役(?)を演じているため、物語はかなりややこしいが、カンのいいあなたなら、当然推定できるはず……。4人の男を殺した犯人が死刑となるのは当然だが、野村芳太郎監督は心に秘めた目的を遂げた後、かえってすがすがしい気持で牢の中での毎日の生活を送る死刑囚の姿を見事に描いている。さて、どうすればそんな心境になれるのだろうか？

そして映画では、さらにそこからもう1つ大波乱が……。それは映画を観なくては絶対わからないものだから、是非映画を……。

2006(平成18)年1月13日記